

## 研究課題：17世紀イタリアで独立した芸術家同士の間で行われた共同制作に関する研究

本研究は、17世紀イタリアにおける独立した芸術家による共同制作を調査したものである。17世紀ネーデルラントでは、動物や花、風景の描写に長けた専門画家と人文主義的教養を備えた物語画家が、協力して1点の絵画を制作することがあった。例えば《縛られたプロメテウス》(フィラデルフィア美術館)では、人物画家ルーベンスが巨人の身体を描き、その肝臓をついばむ鷲を動物画家スネイデルスが担当することで、愛好家の期待に応える作品となっている。同じく美術の中心地であったイタリアでも同様の事例が見受けられるものの、作家研究のなかで断片的に言及されるに留まってきた。この問題を踏まえ、本研究では17世紀イタリアにおける共同制作に関する基礎的調査を行った。

(1) 作例の収集 まず、多くの芸術家が集まった17世紀前半のローマで活動経験がある画家の絵画総目録や図録等を点検した。複数の画家が関与したとされる作例が確認できたのは、風景ではブリル兄弟、アゴスティーノ・タッシ、建築ではフィリッポ・ナポレターノ、ジャン・ルメール、ヴィヴィアーノ・コダッツィ、静物ではパオロ・アントニオ・バルビエリ等であり、壁画と画架画に大別される。

(2) 作例の実地調査 2019年9月8～19日にローマを訪れ、教会(Santa Maria Maggiore, Santa Cecilia in Trastevere, Scala Santa)、邸宅(Casino di Villa Boncompagni Ludovisi, Casino dell'Aurora Pallavicini, Palazzo Mattei, Palazzo Caetani)等で壁画を調査した。画架画に関しては、カピトリノ美術館でグエルチーノ作品を調査し Dr. S. Guarino と意見交換した。主要美術館(Palazzo Colonna, Palazzo Doria Pamphilj)では新たに調査対象とすべき作例を見出した。

(3) 作例の分類と分析 調査を踏まえ、17世紀前半にローマで行われた共同制作について、縦軸を「壁画／画架画」、横軸を「風景／建築／静物」とし、表を作成した。この分類について国際ワークショップで発表し Dr. S. Schütze らと議論した。("A Study of Collaborative Works created by Independent Artists in Seventeenth-century Italy," The 2nd Joint Workshop Kyoto University – University of Vienna, 25 October 2019, Kyoto University, 45 minutes)

成果を総括する。壁画に関して、ローマでは16世紀末から専門画家が風景や遺跡を担当しており、イタリア特有の傾向が見られた。当地には複数の画家が区画ごとに分担して壁画を制作する伝統があるが、17世紀以降、一画面上で人物と風景が等しい存在感をもって表される事例も確認でき、今後の事例研究の対象とする。画架画に関しては、風景・建築・静物の分野で専門画家が携わる作例を集積できたものの、その関与の度合いや完成度は様々であった。例えば、グエルチーノ周辺の複数の画家が関与した作例では、専門画家は人物画の一部を補助的に描く程度に留まる。他方、今回の調査で、ネーデルラントの共同制作の典型である「花環の聖母子」を踏襲した作例(カルロ・マラッタとジョヴァンニ・スタンキ等)や、ネーデルラントの共作の先例から直接着想を得た作例(デュゲとクールトワ等)が実見できた。今後は、芸術家が画技を競い合う発展的共同制作と判断できた作品、史料によって共作が裏付けられる作品の事例研究を積み上げ、画家同士の交流を追うことで、17世紀イタリアにおける共同制作の実態を把握したい。